盛岡市内遺跡群

―平成12年度発掘調査概報―

2001. 3

盛岡市教育委員会

例　　言

1．本書は平成12年度盛岡遺跡群発掘調査の概報である。なお、盛岡市前九年に所在する教育委員会文化財収蔵施設の火災によって、資料の大部分が焼失したため、残存する資料をもって編集した。今後、罹災資料の整理により、修正の必要性がある。

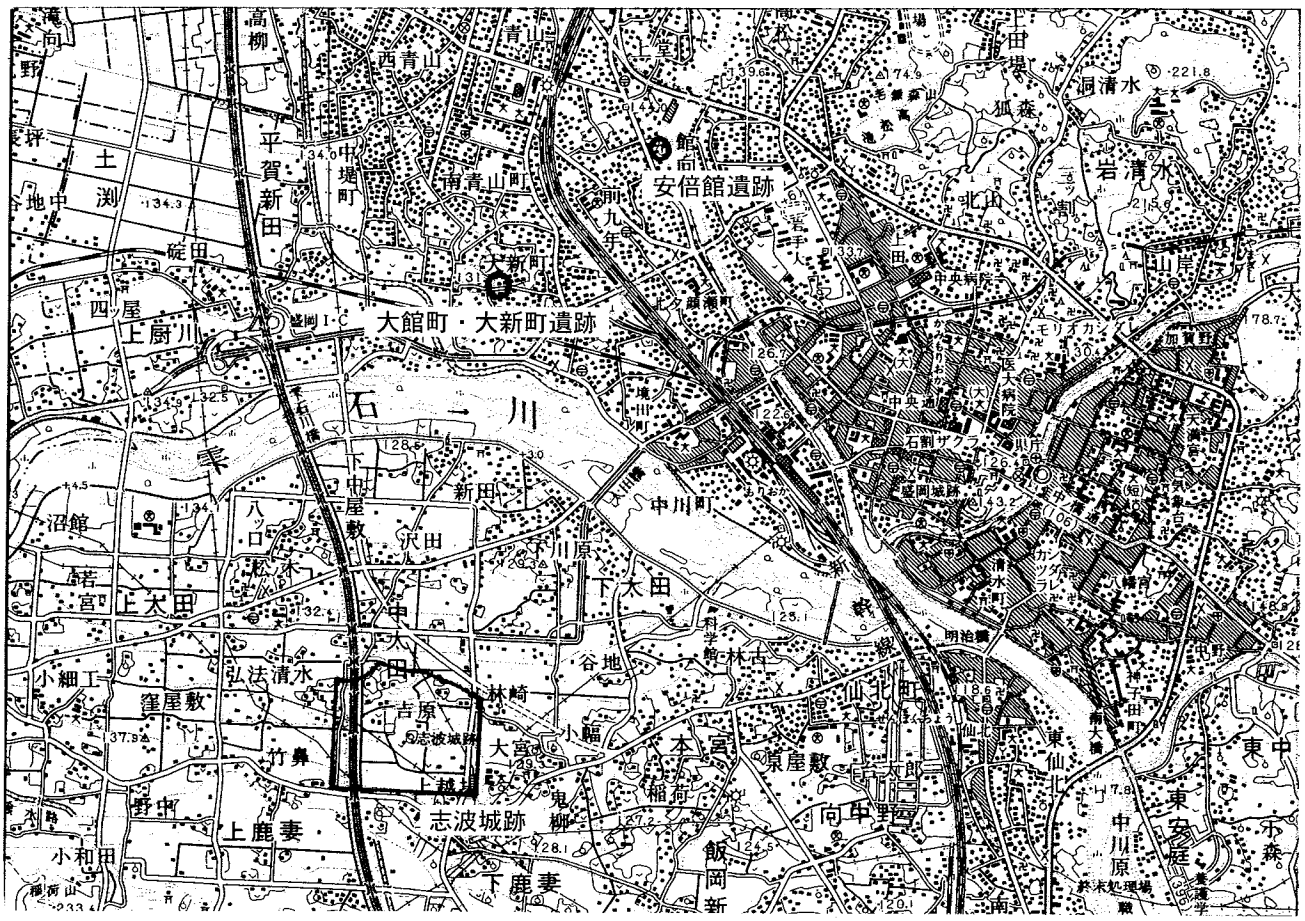
2．本書の編集執筆は、盛岡市教育委員会文化課佐々木亮二・神原雄一郎・津嶋知弘・三浦陽一・千田和文・似内啓邦・室野秀文・藤村茂克・今野公顕・花井正香・平澤祐子・佐々木紀子・岩城志麻がおこなった。

3．平成12年度の国庫補助事業による発掘調査は、大館町遺跡第66・68次調査、大新町遺跡第67次調査、安倍館遺跡第77次調査、志波城跡第89次調査の５件を実施した。

4．調査の実施にあたって、次の方々から御指導・御協力をいただいた。記して謝意を表する(敬省略)。文化庁文化財部記念物課、岩手県教育委員会文化課、石川三四郎、上村トミエ、工藤和助、佐藤ミチ、三浦彩子、武蔵功、菱和産業㈱

目　　次

例言
目次
1．大館町・大新町遺跡・・・・・・・・・・・・・2
2．安倍館遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・12
3．志波城跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・15



第１図　遺跡位置図(１：50,000)

1．大館町・大新町遺跡

これまでの調査　大館町・大新町遺跡は盛岡市の北西部、雫石川北岸の火山灰砂台地南縁部に位置し、縄文時代中期を主体とする大館遺跡群に包括されています。

大館遺跡群は西から大館堤・大館町・大新町・小屋塚・前九年・館坂遺跡が立地し、さらに一段下がった段丘面にも平安時代から江戸時代までを主体とした稲荷町・里館・安倍館・宿田南などの遺跡が存在しています。大館町・大新町遺跡の調査は昭和55年度から継続して行われており、大館町遺跡はこれまでの調査により東西約220m、南北約250mが遺跡範囲と推定されており、縄文時代中期中葉から後葉、東北地方の土器編年上のいわゆる大木８ａ・８ｂ式期を主体とした竪穴住居跡群をはじめ、南端から西端部にかけては前期末葉から中期中葉の密度の濃い遺物包含層等が確認されています。

大館町遺跡は遺構・遺物量ともに県内でも第一級の縄文期の集落跡であり、特に土器の種類が多様で量的にも卓越しており、その重要性から平成12年11月24日付で岩手県指定史跡になりました。

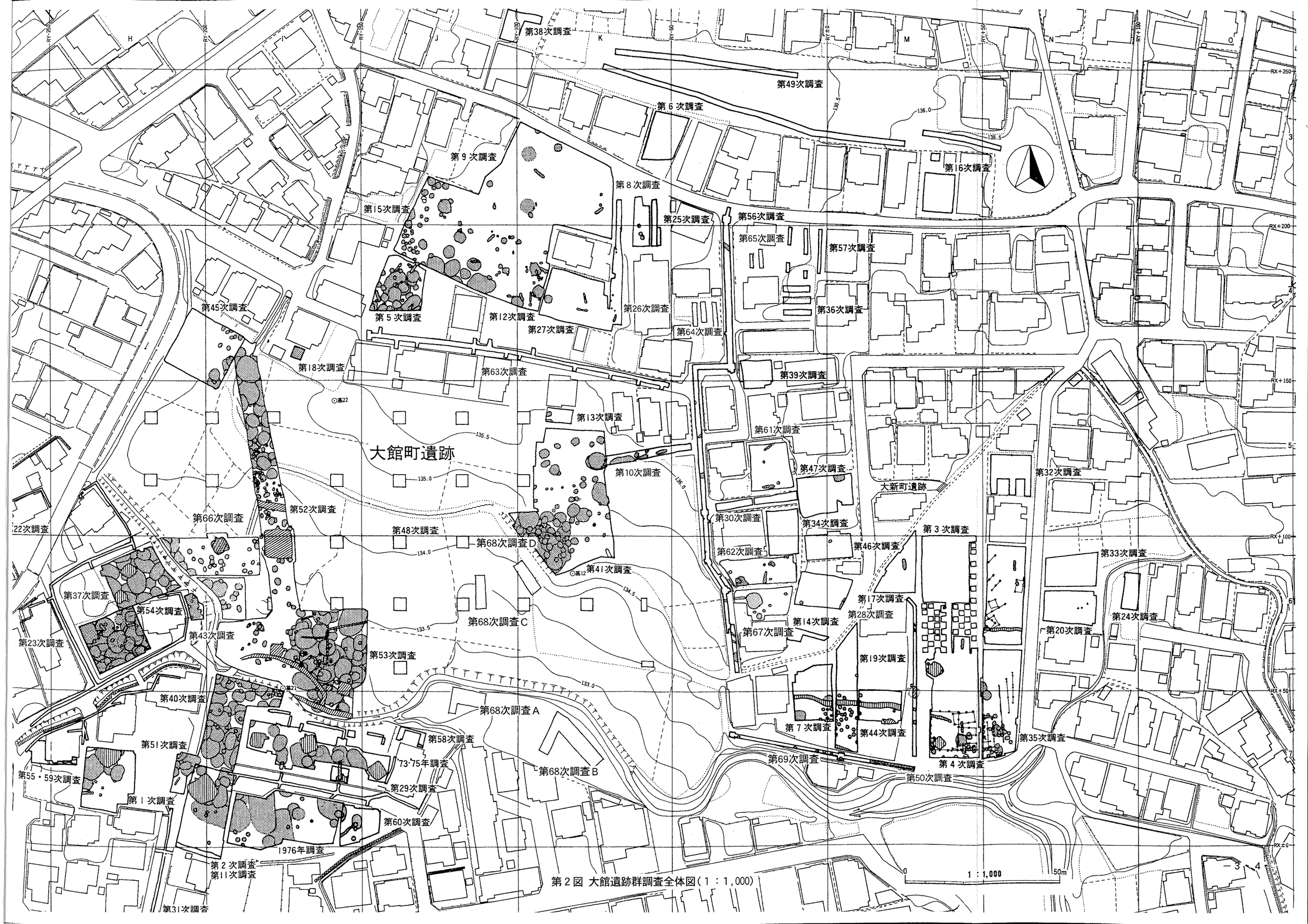
また、大新町遺跡は大館町遺跡の東に隣接する台地に立地し、縄文時代草創期の爪形文土器群、早期前葉の竪穴住居跡およびこれに伴う押型文・沈線文土器が多量に出土したほか、中期の土坑群や平安時代（10世紀後半）の竪穴･掘立柱建物跡等を検出しています。

平成12年度の調査

遺跡名	次数	所在地	調査原因	面積	期間
大館町	66	大新町210	学術調査	453㎡	H12.4.10～ H12.5.19
大新町	67	大新町16－17	住宅改築	137㎡	H12.5.19～ H12.6.20
大館町	68	大新町207－2 大新町208－1	学術調査	280㎡	H12.7.10～ H12.8.10
大新町	69	大新町13－12	公設下水	72㎡	H12.12.1～ H12.12.19

なお、市費単独事業として今年度は、下水管敷設にともなう事前緊急発掘調査を第69次調査として実施しました。調査区は昭和60年に多量の草創期の爪形文系土器群が出土した第19次調査区の南側の道路に位置しています。検出された遺構は縄文時代の土坑６基、古代以降の溝跡が２条のほか、縄文時代中期から草創期の遺物包含層が確認されており、爪形文土器が数点出土しています。

写真１　大館遺跡群航空写真



第2図 大館遺跡群調査全体図（1：1,000）

写真２　第66次調査区全景（北西から）

(1)　大館町遺跡第66次調査

位置　大館町遺跡は、雫石川北岸の火山灰砂台地の縁辺部に位置します。第66次調査区は遺跡の南西部、遺跡西端を南流する農業用水路（小諸葛川）に接する南向きの緩傾斜面の畑地に位置します。

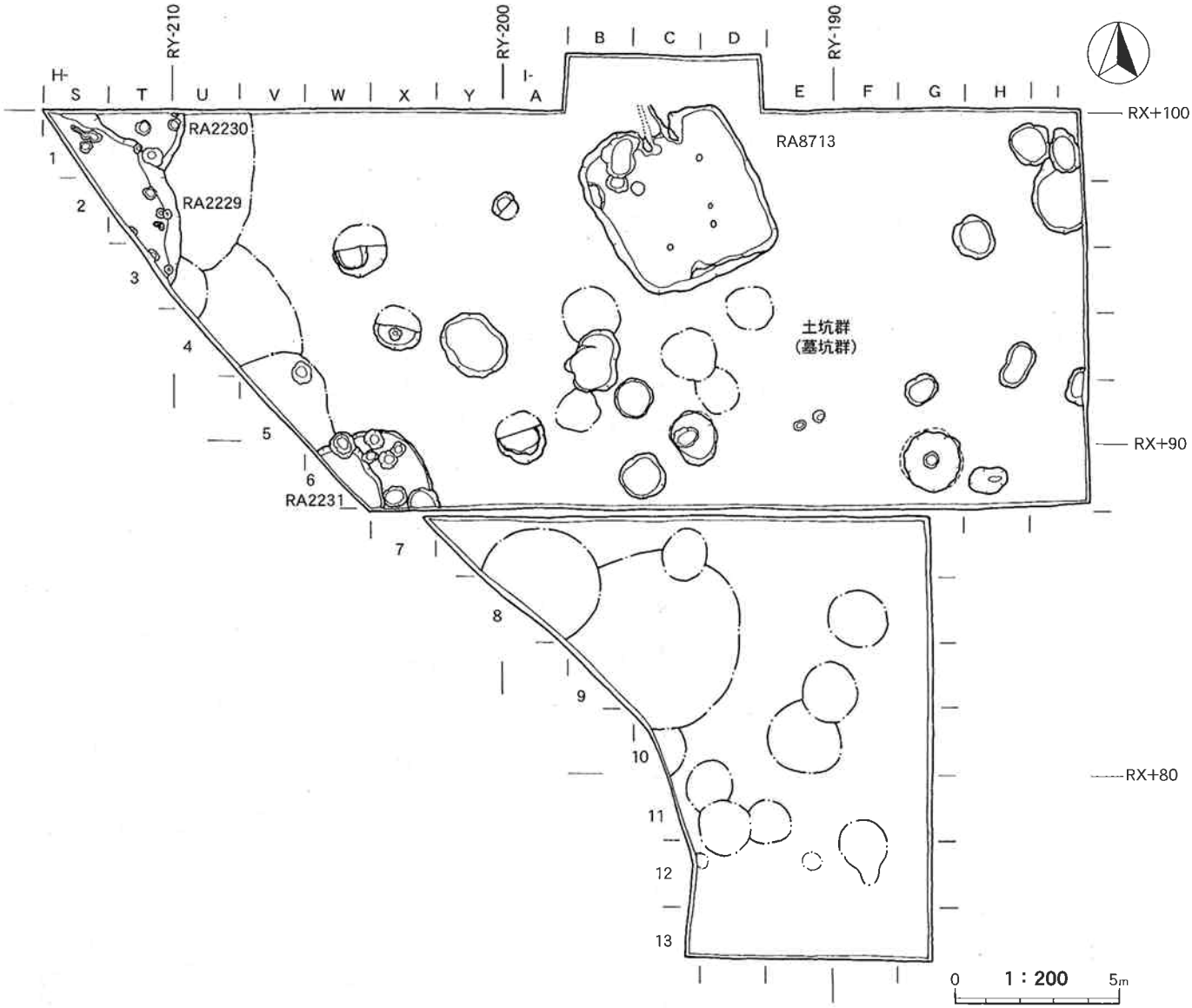
周辺の調査　周辺の調査は、これまでに盛岡市教育委員会により第１・２・11・22・23・31・37・40・43・51・55・58・59・60次の計15地点の調査を実施しています。特に、用水路を挟んだ西側で、平成２年度に住宅改築にともない実施された第37次調査では、縄文時代中期の竪穴住居跡41棟を検出しました。さらに、平成６・７年度の第54次調査でも中期に属する竪穴住居跡が33棟検出されています。なお、37・54次調査の周囲は、昭和62年度に下水管敷設にともなって23次調査を実施しており、その成果から相当量の遺構密集区であることが判明しています。

調査の内容　今回の調査は、『大館町遺跡保存管理計画』を策定するうえで必要な集落跡の広がりや密度を把握する目的で実施しました。

発見された遺構は、縄文時代中期に属する竪穴住居跡９棟、土坑・墓坑30基、奈良時代の竪穴住居跡１棟です。今回は範囲確認を目的とするため大部分の遺構は検出だけにとどめ、竪穴住居跡４棟、土坑・墓坑14基について精査を行いました。

住居群は調査区の西～南西側にかけて発見され、調査区中央～東側には、土坑・墓坑群が広がっています。

遺物は縄文時代中期の土器・石器が大半を占めています。大木８a式期のRA2231、大木８b式期のRA2229、2230竪穴住居跡からは多くの遺物が出土しています。



第３図　大館町遺跡第66次発掘調査全体図

写真３　ＲＡ2229竪穴住居跡（南東から）

調査のまとめ　今回の調査では、大館町遺跡南西部の住居区域と第52・53次調査で確認された中央部の広場・土坑区域との境界を確認することができました。

住居群は調査区の西～南西部にかけて集中しており、中央～東部は土坑・墓坑群が広がっています。つまり、遺跡全体の遺構配置から考えると、住居区域は遺跡全域に広がっているのではなく、中央部付近に空閑域が存在している可能性があります。

しかし、調査区東部は地山まで削平されている部分があり、本来存在した遺構が削られている可能性もあります。

(2)　大館町遺跡第68次調査

概要　第68次調査では本遺跡の東部から南東部にかけて、トレンチによる遺構・遺物の広がりを確認する調査を行いました。調査区は南側にＡ・Ｂトレンチ、北側にＣ・Ｄトレンチをそれぞれ設定しました。その結果、遺構はほとんど検出されませんでしたが、低地に形成された遺物包含層を確認することができました。

調査の内容　Ａトレンチは本遺跡の南東部に位置し、低地の中央部にあたります。表土直下からは弥生時代初頭の石囲炉を伴う竪穴住居跡を検出し、石囲炉からは高杯と甕が出土しています。住居の壁は削平されてほとんど残っていません。また、大木７ａ・７ｂ式を主体とする縄文時代中期の包含層を確認しています。

Ｂ・Ｄトレンチでは低地の東側の肩部に当たる部分を検出しました。

ＣトレンチはＡトレンチと同様に低地の中央部に当たる場所であり、縄文時代前期～中期に相当する遺物包含層を確認しました。厚さは表土下１ｍで、いずれの層も東から西へ傾斜しており、包含層はさらに西側に続くものと考えられます。

縄文時代中期の遺物を多量に含む層の下部には、遺物が出土しない黒色土の層が厚く堆積していました。この黒色土は縄文時代前期の頃に降り積もった、岩手山を噴出起源とする火山灰と考えられています。

調査のまとめ　第68次調査で確認された低地は北東部と南東部の住居区域を画するものであり、大館町遺跡の集落形態が地形に左右されている可能性を示唆しています。また、包含層で確認された黒色火山灰層も集落の成立時期を考えるうえで重要な発見といえます。この火山灰層の下からは縄文時代草創期～前期初頭の遺構・遺物が確認されていることから、縄文時代前期の頃の短い期間に人の住まない時期があったと考えられます。

今回の調査では面積は少ないながらも大館町遺跡の集落を解明するうえで、多くの貴重な情報が得ることができました。

写真４　Ａトレンチ全景（北西から）

写真５　Ｂトレンチ全景（北東から）

写真６　Ｃトレンチ全景（北東から）

写真７　Ｄトレンチ全景（北東から）

写真８　大新町遺跡第67次発掘調査風景

写真９　ＲＡ6513竪穴住居跡（南東から）

(3)　大新町遺跡第67次調査

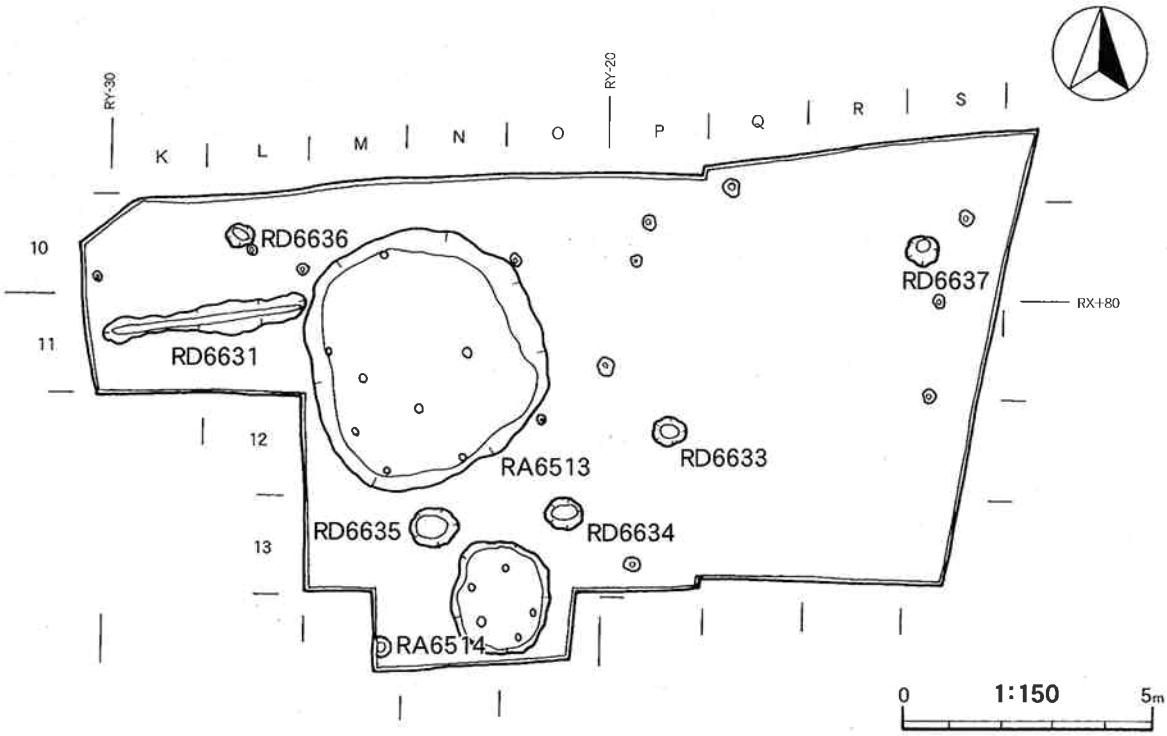
位置　第67次調査は、個人住宅建設に伴う事前発掘調査として実施され、平成９年度におこなわれた第62次調査の南側に位置します。

過去の調査　大新町遺跡は、昭和40年代に武田良夫氏によって発見され、東北地方でも数少ない縄文時代早期前葉の遺跡であることが確認されました（＊1）。

昭和57年度より個人住宅建設に伴う事前の発掘調査が盛岡市教育委員会によって実施され、現在までに縄文時代草創期（約10,000年前）の爪形文土器、早期前葉（約8,500年前）の竪穴住居跡、多量の押型・沈線文土器、後期（約4,000年前）の土器・石器が発見されています。

調査の内容　調査面積は214㎡で、縄文時代早期竪穴住居跡２棟、土坑６基、縄文時代早期～後期・弥生時代後期の遺物包含層が検出されました。

＊1　武田良夫 1969「盛岡市上堤頭・小屋塚遺跡の押型文土器」『考古学ジャーナル』36号、武田良夫・吉田義昭 1970「盛岡市大新遺跡」『奥羽史談』54号、武田良夫 1982「岩手県における押型文土器文化の様相」『赤い本』創刊号



第４図　大新町遺跡第67次調査全体図

ＲＡ6513竪穴住居跡　ＲＡ6513竪穴住居跡は調査区西側より発見されました。

規模は、約4.7m×5.2mの不整円形を呈し、深さは約0.7mをはかります。

埋土はＡ～Ｄ層に分けられ、各層はさらに細分されます。Ａ層は黒褐色土を主体とする層。Ｂ層は暗褐色土を主体に火山噴出物(軽石など)を含む層。Ｃ層は秋田駒ヶ岳を噴出起源とする火山灰(堀切軽石)層で、Ｄ層は噴出起源が岩手山と考えられる黒色火山灰を主体とする層が堆積しています。

床面からは、柱穴と考えられるピットが11口検出されていますが、深さは全て0.1m前後と浅いものでした。

出土遺物は、各層で時期が異なります。Ａ層からは早期後葉から前期初頭にかけての遺物が若干量出土しました。Ｂ層からは沈線・貝殻文を主体とする土器・石器が多量に出土し、Ｃ層を境に、床面およびＤ層からは押型文を主体とする土器・石器が多量に出土しました。

住居内に堆積する堀切軽石層は今から約8,000年前に降下した火山灰と考えられていることから、火山灰層より下層のＤ層から出土した押型文土器の年代は、それよりも古い年代の所産であることが考えられます。

Ｄ層より出土した押型文土器は、「大新町式」と呼ばれる土器で、大新町遺跡の発見者である武田良夫氏によって型式設定された土器です。文様は、円柱状の材にＶ字・菱形などの文様を陰刻し、土器の表面に回転させて文様を施文する技法を特徴とします。

石器は石鏃・削器などが出土しています。最も多いのは石器を製作する際に生じる剥片・チップなどで、未製品も多数発見されています。

Ｂ層より出土した土器は、沈線・貝殻文を主体にする土器で、特に施文には貝殻が多用されるようになります(貝殻文土器)。器面には縦方向のミガキ調整が施され、光沢を持つものもあります。

上記の貝殻文土器は、青森県八戸市小舟渡平(こみなとたい)遺跡出土の土器を標式とした小舟渡平式と呼ばれる土器に類似するもので、貝殻文土器でも古い段階のものです。

写真10　ＲＡ6513竪穴住居跡土層断面

写真11　ＲＡ6513竪穴住居跡Ｂ層出土土器

写真12　ＲＡ6513竪穴住居跡Ｄ層出土土器

遺構・遺物包含層出土石器　第５図１～８はＲＡ6513竪穴住居跡、９はＲＤ6631土坑、第６図10～22は遺物包含層（Ｖ層）から出土した石器です。

１は石鏃の未製品と思われるもので、縁辺には整形するための調整剥離が施されます。２は尖端部が欠損する石鏃で、基部は平坦に整形されます。３は基部が欠損する石鏃で、先端部には丁寧な調整が加えられます。

４は剥片下端に刃部を持つ削器です。打瘤は剥離除去されています。５は全周縁に整形剥離が施される小形の石篦で、打瘤は剥離除去されています。６は両面に整形剥離が施される削器です。尖端部が造出されることから石槍を意識した製品であることも考えられます。７は、両面に整形剥離が施される削器です。上半部は欠損しています。８は端部が尖る削器で、端部付近にのみ丁寧な調整剥離が施されます。

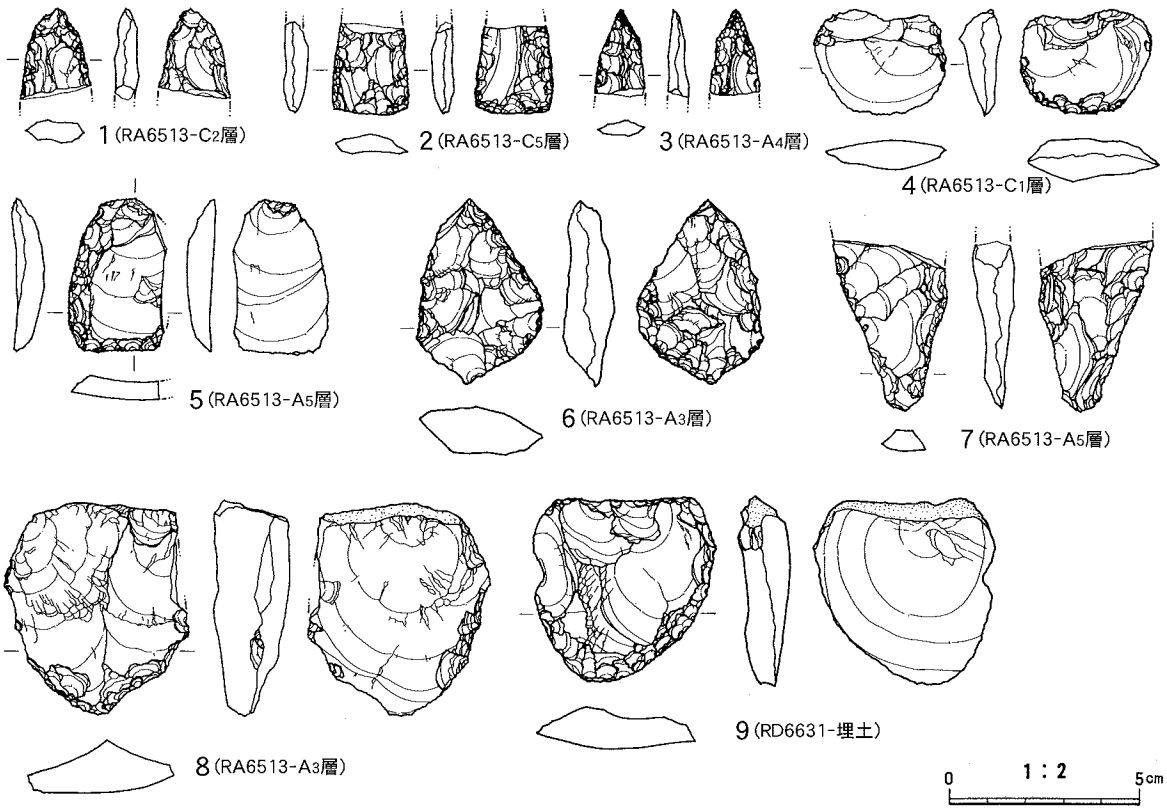
９は剥片下端に整形剥離を施す掻器で、腹面には剥離が施されません。

10は基部が緩やかな弧を描く石鏃で、11は先端部のみ残存する石鏃もしくは石槍です。12は基部が平坦に整形される石鏃です。13は基部が欠損する石鏃ですが、破損後に再加工を施したものです。

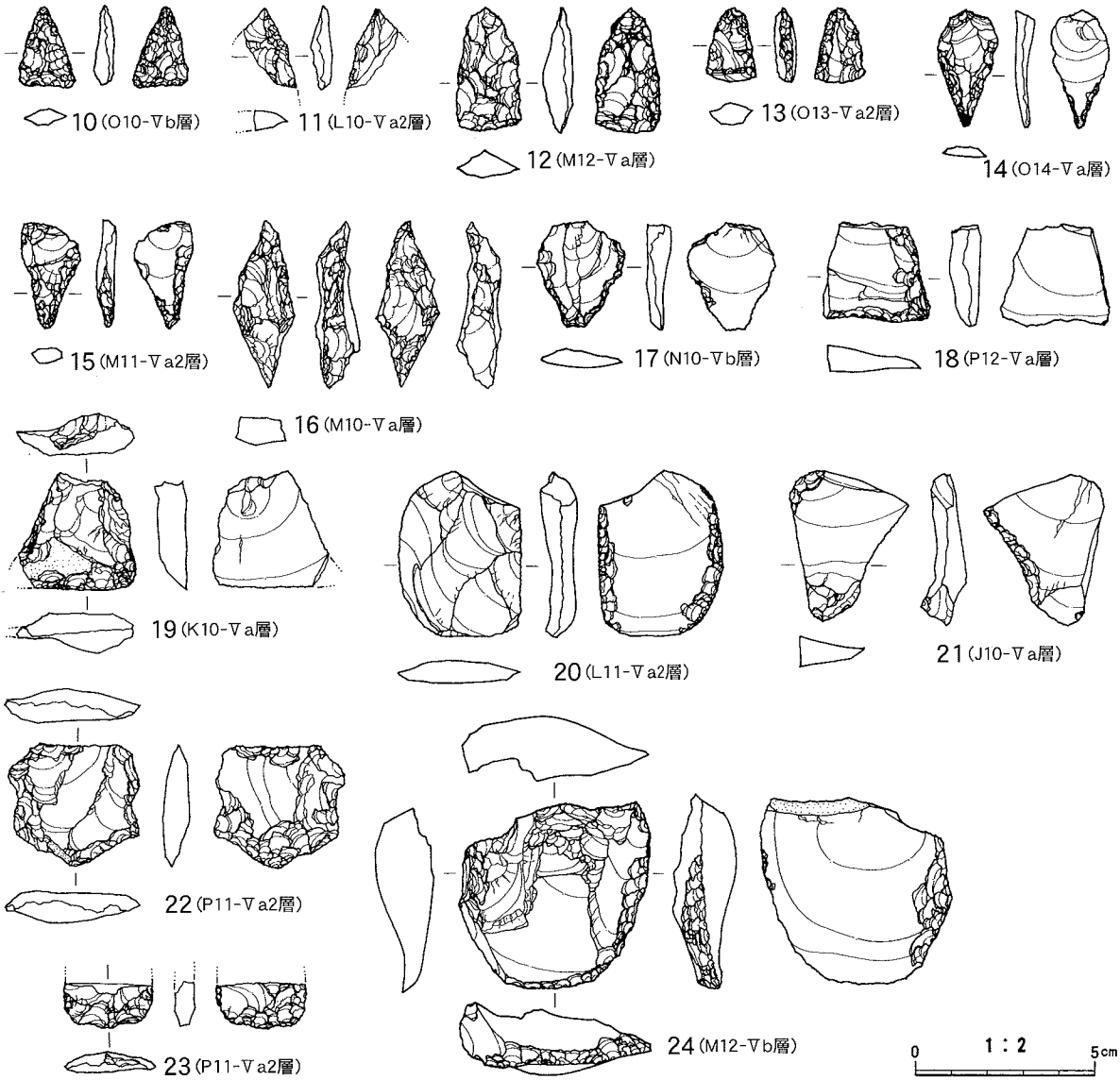
14～16は石錐で、14・15は機能部のみに整形剥離が施され、16は全周縁に剥離が施されるものです。

17～21は削器で、17は基部を除く縁に細かい剥離が施されます。18は背面２側縁に剥離が施され、剥片右半分は欠損しています。19は全周縁に剥離が施され、剥片右下端が欠損しています。20は腹面２側縁に刃部調整を施すもので、打瘤は腹面からの打撃で除去されます。21は背面右上端、腹面右側縁に剥離が施されるものです。

22は全周縁に剥離が施される掻器で、刃部には凹凸があります。23は刃部のみが残存する掻器です。24は基部を除く周縁に整形剥離を施す半円形の掻器で、打撃面には原石の表皮が残ります。



第５図　ＲＡ6513竪穴住居・ＲＤ6613土坑出土遺物



第6図　遺物包含層出土遺物

調査のまとめ　今回の調査によって、過去の調査でも確認されていた早期前葉の集落がより拡大されることが明らかになりました。

新たに確認されたＲＡ6513竪穴住居跡は、これまでに発見されていた竪穴住居跡よりも掘込みが深く、住居内に堆積する遺物包含層が良好な状態で発見されました。住居内には、秋田駒ヶ岳から噴出した火山灰が堆積しており、火山灰を境にして上層から沈線・貝殻文土器、下層からは押型文土器が出土したことから、両土器群の新旧関係が層位的に明らかになりました。

しかし、調査記録の整理・検討段階で多くの資料が火災により行方不明になる不幸な事故がありました。

現在、厳しい状況のなか復旧作業が続けられ、罹災資料の整理も併行して行われています。本概報において呈示されなかった資料については、整理作業の状況次第により、出来る限りの資料紹介を行う予定です。

2．安倍館遺跡

これまでの調査　安倍館遺跡は火山灰砂台地東辺部、雫石川合流点より北上川を3㎞ほど遡上した盛岡市安倍館町及び上堂一丁目に存在します。標高は138m～148m、北上川との比高差は約20m、対岸は館向町・西下台の低位段丘を挟んで上田段丘上と対峙し、北上川と小さな沢に挟まれた、南北に長い舌状台地です。

安倍館遺跡におけるこれまでの調査は、昭和43年12月本丸南東部の市立保育園建設に先立ち、岩手大学による発掘調査が実施されたのが最初です。このときには、竪穴建物跡が７棟と柱穴群が検出されましたが、古代末期の城柵にかかる遺構と報告され、安倍氏の厨川柵・嫗戸柵に関係する遺構と考えられました。

平成４年度以後、住宅改築等に伴う調査により、本丸内部の状況がしだいに明らかとなってきました。他の曲輪と比較して遺構・遺物ともに多く、その名のとおり城館の主郭であることが立証できましたが、遺物の年代から本丸の存続期間がほぼ16世紀代におさまることが明らかとなり、工藤氏の厨川城であることが確実となりました。しかし、伝承の厨川・嫗戸柵の遺跡が他に特定されたわけではなく、その実態については今後の調査研究の成果に期待されます。

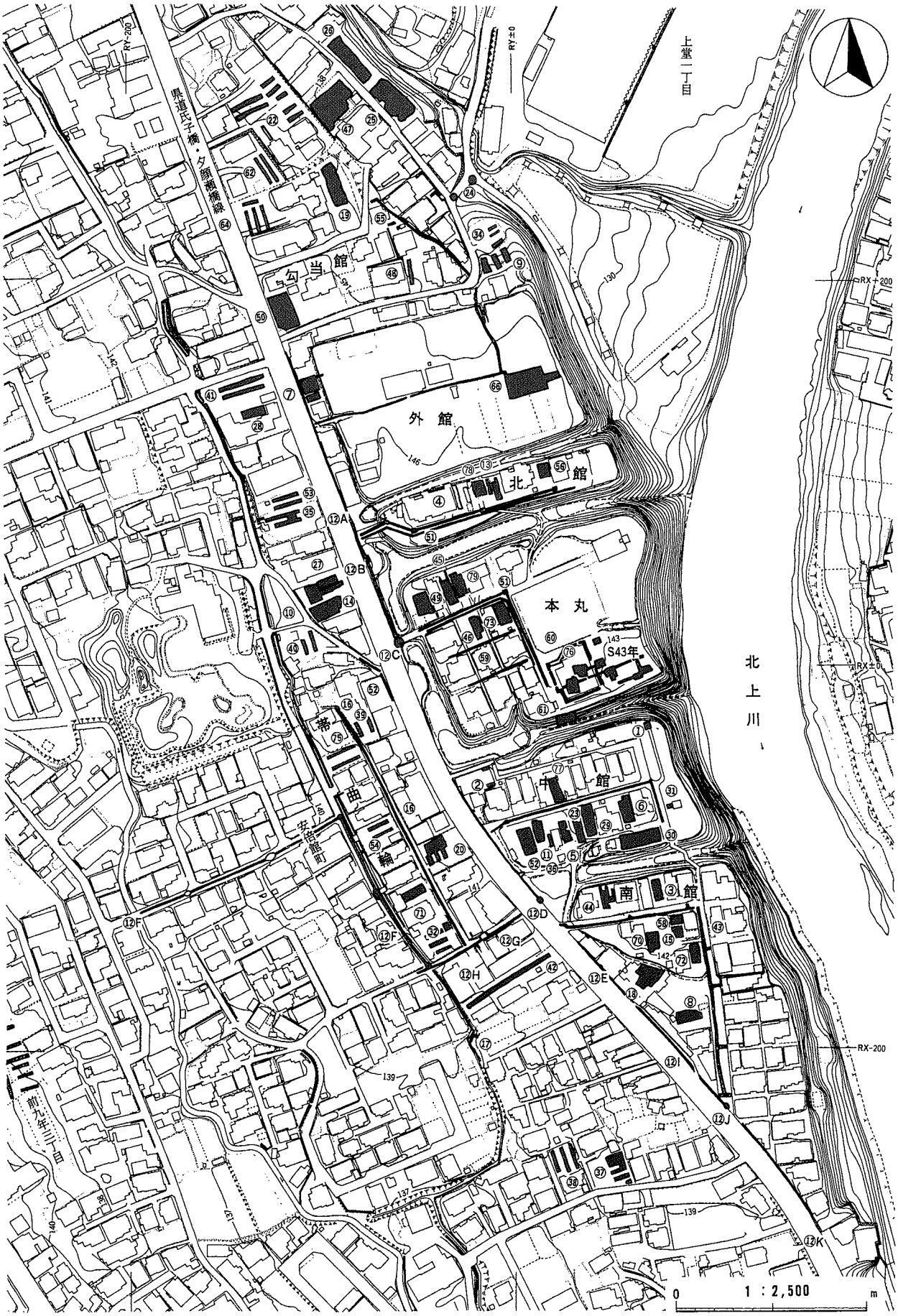
平成12年度の調査

次数	所在地	調査原因	面積	期間
77	安倍館町13－５	住宅改築	48㎡	H12.4.10～H12.4.19
78	安倍館町15－１	住宅改築	51㎡	H12.9.4～H12.9.5
79	安倍館町127	住宅改築	80㎡	H12.11.18～H12.11.27

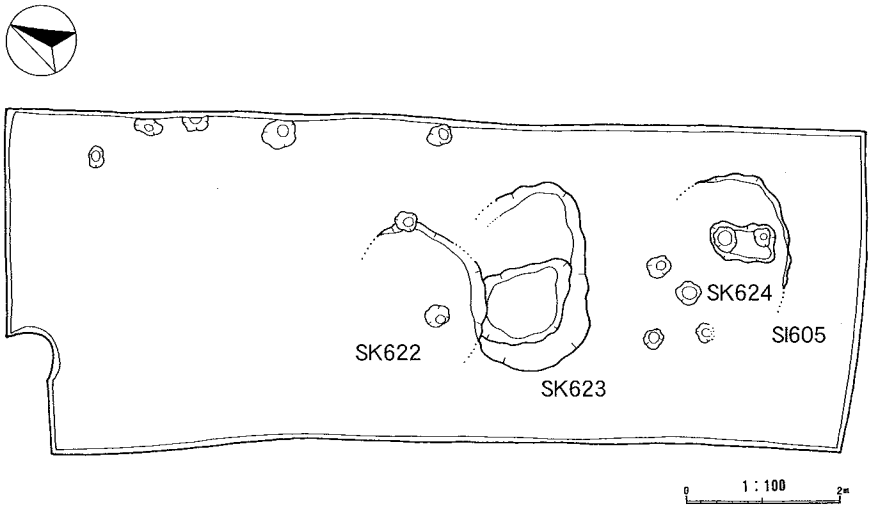
第78・79次調査は住宅改築に伴う試掘調査として実施されました。78次調査区は北館中央部に位置し、第51次調査で確認された道路状遺構の続きと考えられる遺構が検出されました。79次調査は本丸北西部、第45次調査区の東側に隣接する地点を調査しました。検出された遺構は、竪穴建物跡２棟、45次調査区から続く掘立柱列跡１列、溝跡１条、土塁跡１条です。

なお、遺構は検出のみをおこない、調査後盛土と掘削制限により遺構面の保存をはかりました。

写真13　安倍館遺跡航空写真



第７図　安倍館遺跡全体図



第８図　安倍館遺跡第77次調査全体図

(1)　安倍館遺跡第77次調査

位置　第77次調査は、中館中央部付近にあたり住宅建築に伴い実施したものです。昭和58年に実施された第５次調査区は道路を挟んで北側に位置します。

中館の地形　中館は安倍館遺跡東半の６郭のうち、北から５郭目にあたり、本丸と南館の間に位置します。

平面形は東西102ｍ、南北60～67ｍの規模でほぼ長方形を呈し、北上川との比高差は19ｍをはかります。

本丸と画する堀は幅14～21ｍ深さ５～13ｍ、南館と画する堀は幅13～16ｍ深さ３～６ｍの規模を有します。

西側を画する堀は、現状では県道下になっており、堀そのものを確認することはできませんが、県道と中館中央との比高差は1.5ｍほどあり、堀に相当する位置が低くなっています。

中館はほぼ平坦で、西端が緩傾斜をもって県道につながっています。現状では、県道から中館中央を東西に走る道路があり、両側に住宅が建てられています。

中館の調査　中館の調査は盛岡市教育委員会により、これまでに計12地点(第１・２・５・６・11・12・23・29・30・31・36・52次)の調査を実施しています。ほぼ全調査区で掘立柱建物跡を確認していますが、調査区が狭いため、それぞれの建物の全容がわかる例はありません。そのほかに検出された遺構は竪穴建物跡、土坑、溝跡、柱穴群などで、そのほとんどは出土遺物が少ないため時期が不明ですが、掘立柱建物跡の柱間寸法や５次調査で確認された道路状遺構から出土した陶磁器などから推定すると、16～18世紀に属するものと考えられます。

縄文時代の遺構も検出されており、フラスコ形土坑や縄文時代早期の遺物包含層も確認されています。

検出された遺構　第77次調査では竪穴建物跡１棟（SI605)、土坑３基（SK622～624)、柱穴11口が検出されています。

SI605竪穴建物跡は調査区南側で検出され大部分が削平されています。土坑は調査区中央から南側にかけて検出され、SI605竪穴建物跡と同じように、撹乱によって削られています。柱穴群は調査区北東側から南側にかけて検出されています。

遺物は検出面より縄文土器２点、SK622土坑から16世紀末の瀬戸美濃の灰釉折縁丸皿１点、近世以降と考えられる不明陶磁器１点がSK623土坑から出土しています。

調査のまとめ　第77次調査は、いままでほとんど調査されなかった中館北部で行われました。その結果、北部にも竪穴建物跡や土坑が存在することが確認できました。しかし、調査区が狭いため中館全体での竪穴建物や掘立柱建物などの位置関係を把握するまでにはいたりませんでした。

3．志波城跡

これまでの調査　志波城跡は、盛岡市南西部の下太田方八丁・新堰端ほかに所在し、北上川と雫石川のつくりだす沖積段丘上に立地します。

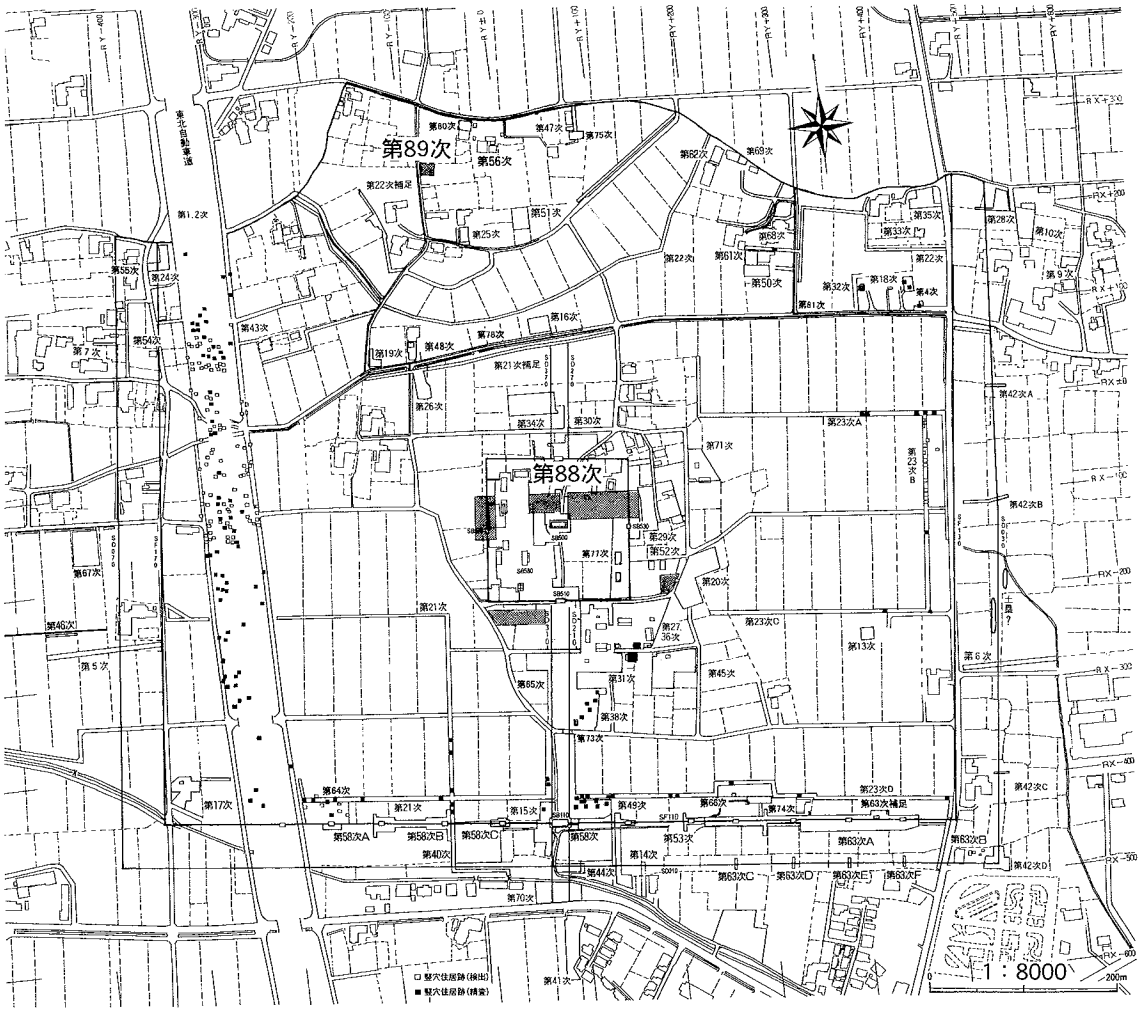
志波城跡の本格的な発掘調査は、昭和51・52年度の岩手県教育委員会による東北縦貫自動車道建設に伴う調査から始まり、その後、昭和52～54年度に盛岡市教育委員会が行った範囲確認調査により、本遺跡が古い文献に記載されているものの、所在が不明であった平安時代初期の城柵「志波城」跡と認められるようになりました。昭和59年には国の史跡に指定されました。発掘調査は昭和55年度以降、継続して行われており、これまでの成果から志波城跡の構造をみてみると次のようになります。

外郭とよばれる外回りは、基礎部分の幅が2.4mの築地塀(土塀の一種で城壁にあたる)と幅5～10m、深さ1.2m～1.5mの外大溝(堀)で二重に区画されています。遺跡の北辺は雫石川の洪水により削られて残っていませんが、推定される外郭の規模は築地線の一辺が840m、外大溝線の一辺が928mで、巨大な正方形だったようです。南辺の築地線中央には五間一戸の大きな南門があり、およそ60mおきに櫓が作られていました。

遺跡中央やや南寄りの位置に、志波城の中心施設である政庁があります。一辺150m四方を基底幅1.8mの築地塀で囲み、各辺の中央には門を設けています。正門となる政庁南門は八脚門で、そこから外郭南門にむかって幅18mの大路（道路）がのびています。政庁の中央には重要な儀式や会議のおこなわれた正殿、その南東と南西に東脇殿・西脇殿など多くの建物跡を確認しています。

政庁の周辺には、官庁街ともいえる官衙建物群があ

写真14　志波城跡全景(南東から)



第９図　志波城跡全体図

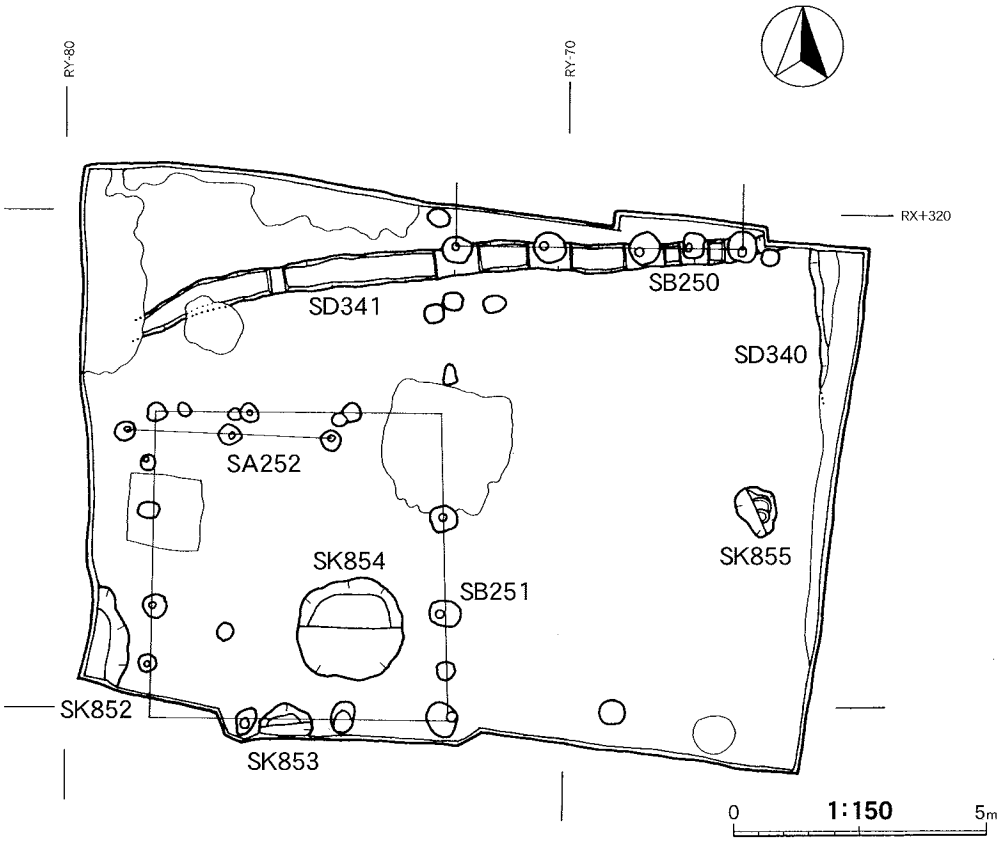
り、とくに調査の進んでいる南東官衙域では多くの建物が整然と配置されていて、少なくとも二時期の変遷が認められます。

外郭築地線のおよそ100m（一町）内側には、竪穴住居が密集して計画的に配置されています。それらはいくつかのグループにわかれるようですが、鉄鏃・鉄斧・刀子などの鉄製品が多く出土していることから、兵士の住居と考えられます。

志波城跡のような遺跡を城柵とよんでいます。城柵とは、奈良・平安時代に朝廷が蝦夷と呼ばれた東北の住民を統治するために設置した行政府のことです。東北の古代城柵の数は文献によれば20前後ですが、志波城はその中でも陸奥国の最北に位置し、また国府であった多賀城に匹敵する最大級の規模をもつことから、平安時代始めにおける朝廷側最前線の拠点であったと考えられます。

平成12年度の調査　志波城跡の平成12年度の発掘調査は２地点を対象とし、このうち市内遺跡群発掘調査事業として行ったのは第89次調査です。

第88次調査は政庁西部・中央部・東部・南門部、東方官衙域、南西官衙域を対象とし、史跡整備に係る内容確認調査として実施しました。調査面積は5,984㎡、調査期間は平成12年８月10日から12月13日までです。検出された遺構は、政庁南門跡、掘立柱建物跡２棟、築地外線・内溝跡、竪穴住居跡２棟、土坑８基、溝跡16条などです。



第10図　志波城跡第89次調査全体図

(1)　志波城跡第89次調査

位置　第89次調査区は郭内北部中央にあたり、北辺旧河道から南へ約70m、外郭西辺築地線から約290mの地点に位置します。史跡現状変更（個人住宅改築）に係る事前調査として実施し、遺構が確認されたため、調査後盛土と掘削制限により遺構面の保存をはかりました。調査面積は150m² で調査期間は平成12年10月2日から10月7日までです。

検出された遺構　検出された遺構は、志波城期以降の掘立柱建物跡2棟（SB250･251）、柱列跡1列（SA252）、溝跡2条（SD340・341）、柱穴11口、近世の土坑4基（SK852～855）です。

SB250建物跡は、東西3間分の掘方を検出したもので、北側の調査区外へ広がる掘立柱建物の一部と考えられます。SB251建物跡は、一部攪乱等で掘方が不明なところもありますが、南北の桁行が5間、東西の梁間が3間の掘立柱建物跡と考えられ、桁行と梁間の総長はともに約6mをはかります。SA252柱列跡は東西2間分を確認していますが、西側の調査区外へのびる可能性も考えられます。

出土遺物はわずかで、SB251建物跡の掘方埋土から土師器片が数点、SK854土坑から近世陶磁器の破片が数点出土したのみです。

調査のまとめ　今次調査区において志波城期以降と考えられる掘立柱建物跡2棟が確認されましたが、郭内北部では、平成2年度の第51次調査において掘立柱建物跡3棟などが検出されている他は、志波城期の明確な遺構が確認されておらず、今後の調査の蓄積によって、この地域の性格が明らかになっていくと考えられます。

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん
書名	「盛岡市内遺跡群」
副書名	平成12年度発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	
編著者名	佐々木亮二・神原雄一郎・津嶋知弘・三浦陽一　他
編集機関	盛岡市教育委員会
所在地	〒020－8532　岩手県盛岡市津志田14地割37番２　TEL019－651－4111　(内線7353)
発行年月日	2001年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
おおだてちょういせき 大館町遺跡	いわてけん もりおかし 岩手県　盛岡市 だいしんちょう 大新町ほか	03201		39度 42分 43秒	141度 07分 02秒	第66次 20000410～ 20000519	４５３	学術調査
						第68次 20000710～ 20000810	２８０	学術調査
だいしんちょういせき 大新町遺跡	いわてけん もりおかし 岩手県　盛岡市 だいしんちょう 大新町ほか	03201		39度 42分 43秒	141度 07分 08秒	第67次 20000519～ 20000620	１３７	個人住宅建設
あべたていせき 安倍館遺跡	いわてけん もりおかし 岩手県　盛岡市 あべたてちょう 安倍館町13－５	03201		39度 43分 01秒	141度 07分 48秒	第77次 20000410～ 20000419	４８	個人住宅建設
しわじょうあと 志波城跡	いわてけん もりおかし 岩手県　盛岡市 しもおおたはっちょう 下太田方八丁ほか	03201		39度 41分 09秒	141度 06分 47秒	第89次 20001002～ 20001007	１５０	現状変更 (個人住宅建設)

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大館町遺跡 第66次	集落	縄文時代	竪穴住居跡　9 土　　坑　30	縄文土器・石器	住居区域と中央広場の境が確認された。
		奈良時代	竪穴住居跡　1	土師器	
大新町遺跡 第67次		縄文時代	竪穴住居跡　2 土　　坑　6 遺物包含層	縄文時代早期の押型・沈線文土器群が多量に出土	竪穴住居跡から縄文時代早期前葉～中葉の土器が層位的に出土した。
大館町遺跡 第68次		縄文時代	竪穴住居跡　1 遺物包含層	縄文土器・石器、弥生土器	遺物包含層中の無遺物層は、岩手山を噴出起源とする縄文時代前期の火山灰層と考えられる。
安倍館遺跡 第77次	城館 集落	中～近世	竪穴建物跡　1 土　　坑　3 柱　　穴　11	縄文土器・陶磁器	
志波城跡 第89次	城柵官衙	平安時代以降	掘立柱建物跡２ 柱　列　跡　1 溝　　跡　2	土師器	
		近世	土　　坑　4	陶磁器	

盛岡市内遺跡群
—平成12年度発掘調査概報—
平成13年3月30日
発行 盛岡市教育委員会
〒020-0855　盛岡市津志田14-37-2
TEL(019)651-4111　内線7353
印刷 小松総合印刷株式会社
〒020-0827　盛岡市鉈屋町15-4
TEL(019)624-1374